

テレーズとガブリエル・グラデールの 眼の相違に関する一考察

上 條 光 子

Etude sur la différence des yeux entre Thérèse et Gabriel Gradère

Mitsuko KAMIJO

I

フランソワ・モーリャックの作品が「神なき人間の不幸」を描くとするなら、その不幸の原因追求は意味あることと思われる。『テレーズ・デスケイラー』のテレーズが、精神的自己愛に生きて救いに至ってないのに対し、『黒い天使』のガブリエル・グラデールは、物質的自己愛に生きながら救いに至っている。この両者の相違を明確にする為に、各々の眼を詳細に比較し、検討していきたい。というのも眼の相違が結末の相違と関わっている点と、各々の眼が眼全体の約半分を占めている点から、作者がことのほか彼等の眼を意識していたと思われるからである。

II

1. 主人公の眼について

(A) テレーズの場合

(1) 作者から見たテレーズの眼

Ex.1 , et de ton œil méchant et triste tu me dévisageais. p.6

Ex.2 Anne voyait ces yeux toujours secs, ces yeux sans larmes; mais elle ne savait pas ce que pensait Thérèse. p.164

Ex.3 “Je l’ai épousé parce que...” Thérèse, les sourcils froncés, une main sur ses yeux, cherche à se souvenir. p.39

Ex.4 Aucun visage sur qui reposer ses yeux, dans cette foule, hors celui d’Anne. p.43

例1は、モーリャックが最初にテレーズにむかって言っている言葉であり、彼女のあわれな淋しげな眼が、例2で、アンヌがその眼を見ても何を考えているのやらわからないそんな常に乾いた涙の全くない眼として登場し、例3と例4で、眉をひそめた神経質そうな眼として表わされている。

(2) 作中人物から見たテレーズの眼

① テレーズから見た自分の眼

Ex.5 Je mesurai d’un coup d’œil, avec stupeur, cet abîme.. p.85

残念ながら該当する例は一つもなく、ただ「ちらりと見て」の意味で例5に一度使われているだけであった。

㊦ ベルナールから見たテレーズの眼

Ex.6 Ta chère main soutenait ma tête; tn ne détournais pas les yeux de ce liquide verdâtre. p.25

ベルナールの観察によれば、テレーズは、砒素の混ざった液から眼を離さずに彼の頭をささえている。このことから自分を誤魔化すことの出来ないテレーズの一面がわかる。

(3) テレーズから見た人の眼

Ex.7 Etait-il beau? Un front construit- les yeux veloutés de sa race-p.84

Ex.8 Je consens à être rejetée; que ma fille même ne sache plus mon nom, que je sois aux yeux de la famille comme si je n'avais jamais été. p.124

Ex.9 Je n'étais que le sarment, aux yeux de la famille, le fruit attaché mes entrailles comptait seul. p.104

例7でテレーズは、ジャン・アゼベドのことを考えており血族 (race) が気になる様である。事実例18では、自分の娘にさえ名前を忘れられる程彼女の存在が意識されない家族の眼に服従するテレーズの姿が見られる。例9ではもし存在意義があるとしたらただ子供を産むためだけだという家族の眼を絶望的に意識している。次の例で家風がはっきりする。

Ex.10 "Il importe, pour la famille, que le monde nous croie unis et qu'à ses yeux je n'aie pas l'air de mettre en doute votre innocence." p.126

「世間が、我々が一致していると思ひ、世間の眼が、わしがあんたの無実を疑っているとは思わないようにすることが肝要だ」というベルナールの言葉にある様に、夫の家が人の眼を最も気にしていることがわかる。

以上から自分の眼にはなんの関心も示さないテレーズが、家の眼にはひどく敏感であることがわかった。

(B) ガブリエル・グラデールの場合

(1) 作者から見たグラデールの眼

Ex.11 Ses yeux clairs n'avaient pas dû changer depuis l'enfance. p.51

Ex.12 Il fixait sur elle son oeil clair et elle se sentait gênée. p.135

Ex.13 Mais lui-même, le petit Gradère à l'oeil bleu, de qui avait-il reçu l'affreux dépôt? p.249

Ex.14 Gradère l'observait de son oeil bleu. -C'est peut-être toi qui es naïve. p.75

Ex.15 Il fixait de son oeil bleu le malade qui... p.104

例11で、子供の頃から変わることなく澄んでいるグラデールの眼がわかり、例12では、その澄んだ眼によってマチルドが気詰まりを覚えている。例13から例15によるとグラデールは、素朴な罪のなさそうなまなざしをした好青年のようである。しかしもう一つの面も見逃せない。

Ex.16 Il ne la perdait pas des yeux, admirant l'immobilité de cette femme. p.111

Ex.17 Gabriel ne quittait pas son fils des yeux. p.124

Ex.18 c'était Gradère qui maintenant la suivait des yeux et l'observait. p.159

Ex.19 Le malheureux demeurait les yeux fixes, p.214

Ex. 20 Il ne pouvait plus parler, mais ne détachait pas ses yeux des lèvres de sa femme. p. 241

Ex. 21 Son père, qui le suivait de l'oeil, p. 129

グラデールは、例16と例18では恋人のマチルドを、例17と例21では息子のアンドレを、例20では妻を眼で追い、例19のように眼を釘付けにしたままている。このように自分の眼から見失うまいとして獲物（彼をとりまく恋人や息子や妻）から眼を離さないグラデールの動物的側面が見出せる。

(2) 作中人物から見たグラデールの眼

① グラデールから見た自分の眼

Ex. 22 C'est ce jour-là, je crois, que je compris le pouvoir de mes yeux. p. 10

Ex. 23 Le soir j'allais au café en face du Grand-Théâtre. C'était à mes yeux le plus luxueux endroit du monde. p. 18

Ex. 24 A mesure qu'Andrès grandissait, il usa d'un moyen qui, sans doute, me justifiait à mes propres yeux. p. 46

例22にあるように、夜会の時に自分の眼の威力を理解したグラデールは、例23で、自分の入った喫茶店を最上級でほめたり、例24で、息子が使った或る才能が自分から見て自分を正当化してくれるものだと言う。これらから、彼の眼がいかに自信に満ちたものかがうかがえる。

Ex. 25 De tout ce que j'ai commis, l'acte le moins criminel puisqu'il y allait de ma vie... Et pourtant à mes yeux (que c'est étrange!) le seul irrémédiable. p. 225

2度目の司祭あての手紙の中でグラデールは、殺人が自分の犯した罪悪の中で最も軽いものだと言いながら、しかし自分の眼で見ると、唯一の許しがたい行為だと書いている。括弧で、何と奇妙なことかと打ちあけているように、真実をそのまま見る彼の眼はいまだ澄んでいて腐っていないことがわかる。

② マチルドから見たグラデールの眼

Ex. 26 Ses yeux sont d'un fou, ses propos sont d'un fou, songe Mathilde. p. 161

Ex. 27 - C'est bien mauvais signe, dit-elle, qu'il trouve grâce à tes yeux. Il murmura entre les dents. "Idiote!" et soudain, éclata de fureur. p. 195

例26では、マチルドにはグラデールの眼がその言葉と同様狂人の眼としかうつつっていない。例27でも、グラデールが怒りを爆発する位マチルドは、彼の眼が悪のしるしだと決めつけている。

(3) グラデールから見た人の眼

Ex. 28 - J'étais un petit garçon encore, rappelle-toi, un enfant très pur Adila... un séminariste... Ses yeux s'emplirent de larmes... p. 25

手紙の中で司祭に、妻アディラの眼が涙で一杯だったと報告しているが、それは、神学生になったのも彼女を得る為の演技にすぎないと告白したもので、彼女の涙が後悔のそれだと判定している。

Ex. 29 Vos yeux sont d'un enfant très pur, mais qui saurait par une connaissance venue de Dieu. p.5

Ex. 30 il m'est très vite apparu que vous la regardiez toujours avec vos yeux de petit frère, avec un tendre aveuglement. p.6

共に司祭の眼に対して例29では、「貴方の眼は非常に純粹な子供の眼だ」と言い、しかしそれは神によってしかわからない純粹さだということわって自分の眼と区別しているし、例30では、「盲目的愛ともいえる程兄貴としての眼で常に妹さんを見ておられたことが私にはすぐわかりました」と言っ、人の眼に対する注意深さを示している。

以上から、テレーズの眼が、常に冷静で神経をこわばらせた潤いのない淋しい眼であり、血族の眼にひきまわされやすい迷いに満ちた眼であるのに対し、グラデールの眼は、澄んだ罪のない美しい眼をしながらその眼で人を底深く観察し続けそのすごみを使って自信に満ちた判断を下す眼であることがわかった。次は、この両者の眼の違いから一層生き方の違いを鮮明にする為に、各々が眼を上げる時と閉じる時とに絞ってその意味の違いを検討していきたい。

2 主人公が眼を上げる時について

(A) テレーズの場合

Ex. 31 Thérèse leva les yeux et fut étonnée de sa figure dans la glace. p.53

テレーズがアンヌからの手紙に入っていた写真に気付き眼を上げ鏡の自分の姿を気にしたところである。この動作により次の、写真に写ったジャン・アゼベドの心臓部にピンを突きさすという恐ろしい行為に至る。他人の幸福を見ているだけの世界から眼を上げ、自分だけがなぜ幸福になれないのかと訴えている。しかしこれ以後この動作は一度もなされずに終わる。

Ex. 32 Elle n'avait qu'à lever vers lui ses yeux que c'était sa science d'emplir de candeur amoureuse. p.39

テレーズは夫ベルナルに媚を示す方策として彼の方に眼を上げたにすぎない。彼女の態度は彼の理解する習慣に従ったままで、自我を殺し、なりゆきにまかせた彼女の心がうかがえる。

(B) ガブリエル・グラデールの場合

Ex. 33 Gabriel leva les yeux: le clair de lune frappait en plein les volets clos, de larges plaques verdâtres sur les murs décrépits. Mais qu'était-ce donc que cette jonchée? p.61

グラデールも例31のテレーズと同様、眼を上げるにより次の行為に至る。ただテレーズが悪に至ったのに対し彼は善をなした点が異なっている。即ち、司祭館の前に散らばった祝い用の花や葉を、それが司祭をからかう為にした村人の仕業とわかって、すっかり拾い集めたのだ。

Ex. 34 L'autre, toujours penché vers le feu, répondit: - L'avenir est ce que nous le faisons. Sur ces paroles, il leva les yeux vers le jeune homme et fut frappé par son expression de trouble et d'inquiétude. - Eh bien, Andrés? pourquoi me regardes-tu ainsi? p.129

Ex. 35 -Oui, mais la nuit dernière, pourquoi es-tu sorti avec une pelle Il leva vers Mathilde des yeux pleins de terreur et de haine: Alors quoi? Tu m'espionnes, toi aussi? p.184

例34でガブリエルは、将来は自分達でつくっていくものだと答えながらその後の「どうしてお前はそんな風に私を見るのかね」という言葉からもわかるように、眼を上げ、父に疑惑を抱いている息子の眼にぎくりとしている。例35は、愛人の言葉にうろたえた例。ガブリエルが殺人を犯してから隠れる様に戻ったところで、マチルドに「昨夜、なぜシャベルを持って出たのか」と問われ、彼女を睨み付けるかのように恐ろしい眼を上げたが、実は「君までも私をスパイしているのかい」という言葉からもわかるように、彼の動揺を示している。そしてこれ以後彼女にも嘘を言い続ける。このうろたえを隠す演技こそ彼を一生偽りの生活に陥らせるものであった。「しまった!」と思ってもまっすぐ相手にむかって眼を上げるこの誤魔化しは、テレーズには出来まい。

以上から *lever les yeux* が、次の行為の糸口となっている例と、心理的に無理のある偽りの行為としてなされている例とに分けられる。第1の場合、テレーズは悪へ、ガブリエルは善へと向かった。各々の結末を暗示した方向である。第2の場合、テレーズは社会的習慣に従ったまでにすぎないのに対し、ガブリエルは自分がそうしなければうまく切り抜けられないと考え自分からそのポーズをとった。テレーズは無理に自我を殺し、ガブリエルは無理に自我を通した。両者の生き方の違いを垣間見ることが出来る。

3. 主人公が眼を閉じる時について

(A) テレーズの場合

Ex. 36 *Thérèse était assise devant le feu de sa chambre, la tête appuyée au dossier, les yeux fermés.* p. 159

Ex. 37 *il ne l'approchait plus - les coqs de l'aube éveillaient les métairies. L'angélus de Saint-Clair tintait dans le vent d'est; les yeux de Thérèse enfin se fermaient.* p. 76

共にテレーズが、彼女を家系の血で縛る現実からやっと開放され一人になりそのゆったりした自由の心境を眼を閉じる行為で示した例である。例36は、ベルナルの留守中であり、例37は、彼が病気になったのもう彼女に近づいてこないからだ。

Ex. 38 *Mais le crépuscule recouvrait Thérèse, empêchait que les hommes la reconnussent; elle y retrouvait le parfum de la vie qui lui était rendue enfin; elle fermait les yeux au souffle de la terre endormie, herbeuse et mouillée.* p. 9

裁判所から出たテレーズが、たそがれの中で地面からの息を深く吸い眼を閉じた。自由の身をかみしめた行為である。

Ex. 39 *Sans doute ne posera-t-il aucune question, ce soir... mais demain? Thérèse ferme les yeux, les rouvre et, comme les chevaux vont au pas, s'efforce de reconnaître cette montée. Ah! ne rien prévoir.* p. 19

Ex. 40 *Elle traversa à tâtons le jardin du chef de gare... Elle se rencogna, ferma les yeux. Était-il vraisemblable qu'une femme de son intelligence n'arrivât pas à rendre ce drame intelligible? Oui, sa confession finie, Bernard la relèverait.* p. 24

共にテレーズが、ベルナルが彼女に有利な証言をしてくれるだろうことを願って眼を閉じている例である。例39では、裁判の席に立つ夫の証言を推測しながら明日の心配からひそかに

祈る気持ちで一度は眼を閉じるが、すぐに眼をあけ絶望の叫びをあげるテレーズ。例40では、一人汽車に乗り隅に坐って眼を閉じ、未来への思いを展開しているテレーズ。「きっとベルナールは私を安心させてくれる」という自由間接話法に先立つこの行為は、現実の分析よりも希望的仮想を存続させたい彼女の気持ちを表わしたものである。

Ex. 41 Vous avez envie de mourir? Elle avait ri... Thérèse se souvient qu'elle avait fermé les yeux, tandis que deux grandes mains enserraient sa petite tête. p. 41

Ex. 42 Thérèse fit un effort pour se lever, mais sa belle-mère l'en empêcha. Elle ferme les yeux, elle entend Bernard dire à Mme de la Trave: ... Mme de la Trave répond à une réflexion de Bernard que Thérèse n'a pas entendue: ... Thérèse rouvre les yeux: Bernard est devant elle; il tient un verre et dit: "Avalez-ça." pp. 166-167

共にテレーズが、夫から離れた心を表わす行為として眼を閉じている例である。例41では、テレーズのたばこを心配しているベルナールが彼女の頭を抱きしめているのに対して、ただ笑っているだけの彼女はその間も眼を閉じて心を開こうとしない。文脈と *tandis que* の対立を示す接続詞から、この行為が、その場にはない彼女の心を示すことがわかる。例42でも、テレーズが眼を閉じている間、唯耳に聞こえる存在にすぎない夫が、眼を開くや彼女の眼前で現実にかける存在となる。彼女にとって眼を閉じることは、その間夫の言っていることを聞いていないことからわかるように、夫を彼女とは関わりが無い存在に押しやる行為であり、現実から離れ、逃れようとする暗黙の抵抗の表われに他ならない。

Ex. 43 Balionte ne remonterait que le soir; tout un après-midi sans tabac! Elle ferma les yeux, et ses doigts jaunes faisaient encore le mouvement accoutumé autour d'une cigarette. p. 155

夫の命令でバリオンテは夕方にしかならないから午後はたばこが無い、というテレーズにとって苦痛ともいえる絶望的现实に甘んじ従う彼女が示し得る抵抗は、眼を閉じた世界だけである。眼を閉じた彼女のたばこを持つ指の習慣的動きからわかるように、この行為により自由を得た彼女は、たばこを夢想しそれに耽るポーズをとる。

Ex. 44 Elle a toujours eu la terreur de mourir. L'essentiel est de ne pas regarder la mort en face..., s'étendre sur le lit, fermer les yeux. p. 138

死を恐れるテレーズが考え出した逃げ道は、死を直視しないで眼を閉じることだと明言しているように、ここではっきりとこの行為が彼女にとって現実からの確実な逃避を意味していることがわかる。

(B) ガブリエル・グラデールの場合

Ex. 45 Gradère pouvait rentrer sans crainte, s'étendre, fermer les yeux. Il ferait l'économie du dîner, sortirait tard. p. 52

Ex. 46 L'abbé se réveilla en sursaut. Gradère ferma les yeux, sentit une main tâter son front. p. 237

共にグラデールが、休息を意味する行為として眼を閉じる例である。例45では、司祭あての手紙を書き終えたグラデールが外に出て飲み屋の前で「ここなら経済的でゆっくり出来る」と心の中で言っているところであり、例46では、司祭館に来た殺人者グラデールが自分の額をト

ントンたたく司祭の手を感じ、眼を閉じたところである。例45は第1章に、例46は最後の章にありこの2度だけ眼を閉じているところから、殺人後の例46は、単なる休息ではなく真の安らぎ・信頼を初めて見出した彼の素直さを表わしているといえよう。

以上から *fermer les yeux* が両者にとって全く別の目的を持ったものであることがわかる。即ちテレーズは、自由を、救いを求める窮地の策として眼を閉じたのに対し、グラデールは、救いを受け入れる行為としてそうした。

Ⅲ

一切を棄て精神界で生きていたテレーズがなぜ何の平穩も与えられず、一切を所有し物質界で生きたグラデールがなぜ平安のうちに死んだのか。この問題は永遠の課題かも知れないが、一つの可能性として私は各々の眼を検討し、その違いから答えを導こうと思った。グラデールの澄んだ眼の方がテレーズの不安そうな眼より真実を見出す可能性は強いという点以上に、両者の眼を通した生きる場の違いに注目したい。テレーズは、現実に対して眼を閉じ、ひとたびその神経質そうな眼を上げるや、しきたりの強いブルジョワ社会の中で自分を窒息させていった。一方グラデールは、物事をするどく見つめる眼で現実を直視し、苦悩の内に眼を上げ続け、最後に真の司祭により解放され眼を閉じた。救いを求める姿が、テレーズの場合は眼を閉じている時であるのに対し、グラデールの場合は眼を上げている時であった。彼女にとって眼を上げるとは、救いをすでに諦める姿である。この現実との関係に遠因があったのではなからうか。

以上から、眼を焦点にして見てもモーリャックが2つの作品を通して2人の対照的な生き方とその最後を見せてくれている事がわかる。故に眼が単なる肉体上の役割以上にその生き方と方向を示す *signe* の役割をも持っていると言えよう。

注

Thérèse Desqueyroux, Grasset, 1927 (Le LIVRE de POCHE)

Les Anges noirs, Grasset, 1936 (Le LIVRE de POCHE)

文 献

浜崎史朗：モーリャック研究，駿河台出版(1972)

Kushner, Eva: *Mauriac*, Desclée De Brouwer, Paris (1972)

Suffran, Michel: *FRANÇOIS MAURIAC*, Seghers, Paris (1973)